

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日発刊 各社別表 季刊誌 第六二七号
明治三十一年十月十日第三種郵便物認可 毎月一回一日発行
平成十七年二月一日発行 定価 百八巻第二号

ホトトギス

二月号



旬日記

汀子

平成十六年二月一日 関西野分会

余寒とも言ひて心のけぢめ置く
東京の暮しに若布携へて
味噌汁に若布の旬となりけり
サラダにも若布加へてありけり
二月一日 下萌句会

こまごまと計画を立て春を待つ
消息に一喜一憂春を待つ

二月二日 ロイヤル俳壇

下萌や大気うるほす朝の雨
室咲に囲まれしより家居かな
厄落す一人となりて紛れけり
春近き雨に誘はれゆくものも
室咲といふ現実と夢の中

二月七日 芦屋ホトトギス会

稿並べすなはち獺の祭かな
光りあふ空と大地よ猫柳
新企画凍解けゆく如くにも

二月十日 大阪倶楽部

卓飾る花のいろく春めきぬ
この中の目立たぬ枝が猫柳
今年ほど待たるる雪解てふ便り
稿債を果す建国記念の日

二月十日 綿業倶楽部

早春のまだ風が身にそはぬ街
紅梅の明かさぬ紅をうながせり
咲くものの早春の香に囲まるる
二月十二日 清交社

立春の日より陽気の後戻り
春菊や茹で足らざるをよしとせり
白魚に目の存在の透けざりし
白魚網水を掬つてをりにけり
透明の失せ白魚のすましの具
たちまちに春めく心添ひゆける
立春の過ぎれば巡りくる忌日
春立つや書かねばならぬ案内状

二月十三日 工業倶楽部

春の風邪気力の勝つてをりにけり
初音聞くとは思はずに來し山路
待たるるは初音よ巡る一周忌
二月十七日 祝こもろ全国俳句大会
えにしとは春めく心もて偲ぶ

二月十七日 有恒倶楽部

いくたびも出てみる川辺猫柳
部屋ごと余寒ひそみてみし家居
早春の期待集めてゆく会話
雪しろが大河を作りはじめけり
野を分けて山の消息雪しろに
川風と海の風合ふ猫柳
招じたる客間の余寒詫びながら

二月十七日 無名会

狐名残とて暁闇の宿を発つ
デージーの鉢の水遣る旅帰り
雛菊の花の色にも主張あり
本当の狐の名残となりし朝
デージーの小鉢並べてみし出窓
考への纏まつて來し雛菊に
次々と早春の日はかりごと

二月十八日 夏潮句会

早春の明るき会話もて集ふ
風渡る水面を占めて薄氷
どら焼は早春のもの配らるる
薄氷の岸辺の草もゆるみそむ
二月二十六日 きざらぎ会

春寒のなき旅先でありしこと
春寒きことも心に旅立ちぬ
よく見れば末黒の芒なりしこと
一雨に消えし末黒の芒かな
始めたる森との対話春めきぬ
春寒き森と共生する我等

二月二十七日 時雨句会

麦踏の山影はすぐ引返す
薄氷の沈黙ほどけはじめけり
麦踏の踏み方を先づ教はりぬ
二月二十九日 野分会
揃ふまで余寒の去らぬ会場に
朝の間の余寒引きずりをりしこと
スケジュール混みて余寒の失せてをり

台風 稲畑汀子

「芦屋市教科等講演会の講師を先生にと言う希望者が多いのですが、非お願ひしたいのですが」

と言う話を引受けなければならなくなって、スケジュールのやり繰りをして九月七日という日を予定に組み込んだ。準備の時間がなかなか取れず「自然と人間」と言う演題に役に立つこれまでの原稿を集めて整理だけして置いた。

気の重い日がだんだん近づいて来た。

今年台風が日本を直撃することも多い。九月になって台風十八号が又々日本に近づいて凄まじい風と雨のニュースがテレビで報じられるようになった。

六日、月曜日の夜仕事から帰るとFAXが届いていた。

「明日七日は稲畑教育委員長様にご講演頂く予定になっております。しかしあいにくの天気で、台風十八号が接近しており警報が阪神地域に出るおそれがあると予測されます。学校教育部長・代表校長先生と相談の上、七日、十三時の段階で警報が発令されている時には、たいへん残念ですが、講演会は中止せざるを得ないという判断をいたしました。……以下略……」

急に嬉しくなった。突然休校になった学生時代の気分を思い出しながら、準備不足の講演会を止めるようにしてくれた魔法の杖

に感謝していた。

「でもまだ警報が出たのじゃないのだ」と、一人つぶやいた。

七日、お昼前のニュースが警報を告げていた。係の先生から電話がかかった。

「本当に残念ですが警報が出てしまいました。校長、教頭、教員は学校を空けることは出来ないのです。講演会は中止になりました。無理をして時間を作って頂きましたのに、お許し下さい」

「いいえ。時間が出来て私は助かります。ご心配なさらないで下さいませ」

嬉しいなんてものではなかった。

玻璃から見える庭の木々を打ちつける風が、ぐんぐん荒れてくるのが見えていたが、雨は余り降っていないかった。

私は平成四年十月二日に任命を受けて芦屋市の教育委員となつて十二年となる。一期四年の任期を三回務め、今回はいよいよ止めさせて欲しいと強く申し出ていた。

教育委員を任命するのは市長である。芦屋市で教育改革を打ち出して日本で初めての女性の市長が誕生したのは十五年程前であつたか。

「北村春江市長が汀子叔母ちゃまに是非会いたって」

甥の誠三が来て私に言った。

「何なのかしら？」

「今度、教育委員を引き受けて欲しいのだそうよ」

「え？ まさか」

お会いするだけと言いながら、我が家を訪ねて下さった北村市長にお会いしたら結局お断り出来ないことになってしまった。

到頭あれから十二年経ってしまつたのである。

教育委員長を三回したが、平成七年の阪神淡路大震災の時も委員長であつた。月に二度の委員会は第一と第三金曜日の四時と決まっている。その日は朝上京して朝日俳壇の選句をしてとんぼ返りをしなければならぬのは大変であつた。しかし、それも何時かその様なリズムが出来てすっかり慣れてしまつた。

「稲畑先生、今日は委員会の前に山中市長が挨拶に来られますので少しお待ち下さい」

東京からとんぼ返りで駆けつけた私を待ちかねたように教育長や管理部長達が言つた。今年から男性の市長である。

「私、いよいよ無罪放免ですね」

と言う間もなく山中市長が駆け込んで来られた。

「本当にお忙しいのに十二年という長い間、有り難うございました。今後とも何かとよろしく。また力をお貸し下さい」

山中市長は丁寧な頭を下げられた。

「いつの間にか十二年が経つてしまつた感じがします。でも、十二年歳を取つたわけですね。やはり限界を感じます」

と頭を下げながら十二年の歳月を私は、振り返つていた。

「芦屋市の方でお役に立てることがあれば何でもおっしゃつて下

さい。我々にも又先生のお力を貸して頂きたい」

「はい。芦屋市民の一人として側面から応援させて頂きます」

私と一緒に教育委員になつた牛田さんが少し遅れて来られた。

「牛田さんはまだ残られるのでしょうか？」

と聞く私に

「いいえ、稲畑先生と一緒に教育委員になつて十二年、任期満了ですよ。勿論僕も止めます」

十月一日までまだ任期が終わつたわけではない。教育委員長も九月一杯の任期である。

教育委員長としての講演会が台風でやめになり、今日の教育委員会が最後となつた。

廣太郎句帳

廣太郎

平成六年二月二日 俊英句会

探梅や芝公園も御湿りに

春泥となりつつ街路樹を育て

猫は逃げ犬は寄り来るしよしゆんかな

春を待つ河馬の欠伸でありにけり

二月十二日 土筆会

京菜てふ古都の香りでありにけり

虚子門に碧梧桐忌の来りけり

雛菊の風に従はざる高さ

西方は今霾れる浄土とも

煮凝に酒の蘊蓄始まり

春の寺早や一周忌迎へたる

霾や六甲いよよ丸くなり

二月四日 一水会

獵名残てふ銃声でありにけり

二月二十五日 目黒学園句会

荒地にも色置き初めし二月かな

二月十七日 草木瓜会

露の臺土の黒さに紛れざる

春浅し飛行機雲は西に伸び

鶯に都心解れてゆきにけり

春浅し足の短き犬連れて

二月五日 蕉心会

鶯に枝弾かれてをりにけり

北国の明るうなりて露の臺

アスファルトこつんこつんと春立ちぬ

二月十九日 登高会

二月二十七日 時雨会

残雪を越えて陸奥より来る

梅が香に君が切り出す別れかな

麦踏んで日本男児でありにけり

盛会や二月礼者となる人も

春寒し消息絶つて幾年ぞ

バレンタインデーを嫌ひし女かな

下萌や大川少し微笑みぬ

吾娘一人バレンタインの日の厨

君も僕もバレンタインの日は悲惨

寒明の船音水音ありにけり

銀にくれなゐに梅暮れてゆく

バレンタインデー靴箱の溢れし日

雑詠

汀子選

鳴き澄める聞く吾虫か虫吾か
 仏徒とし生きる授戒や露の秋
 露の身を更に生きむと戒衣
 芭蕉林葉先に力ありにけり
 流星に空固まつてをりにけり
 日本の臍で踊つてをりにけり
 論客といふは君かや夏炬燃ゆ
 夏炬辺に語れば虚子は近き人
 まくなぎに遇うて君とは逢へざりし
 群青のアルプス絵巻稲の花
 眺望のアルプスマでの稲稔る
 秋茄子の紫紺の艶に彩れり
 遙々と来て花野道瞬く間
 竜胆をそへて山中めかしけり
 懐旧のビール必ずほろ苦し
 朝よりの雲に関心今日の月
 山繭の色の妙なるうすみどり
 一盞の待たるゝ句座の十三夜

長崎 辻 是心

同

東京 稲畑廣太郎

同

相模原 木村享史

同

長野 瀬在苹果

同

神戸 後藤比奈夫

同

姫路 桑田青虎

同

同

ひとつ啼き夕ひぐらしの数となる
 銀漢や久を哲王棲むところ
 雲辺の月を仰げる秋遍路
 稲の花こぼして厚き男の掌
 書齋てふ文字のるつばにある夜長
 投げ活けて子規忌の花とうべなへり
 雲遠く鷹なほ遠く渡るかな
 蜂の仔を食べて育ちし鷹渡る
 鷹渡るのりすはちくまさしばなど
 偲ぶこと多き平戸の星月夜
 旅寝には惜しき平戸の星月夜
 邂逅の旅の平戸も月の秋
 今はただ思ひ出胸に春惜む
 乗り過したる駅頭の夜桜に
 夜桜に降り立つ無人駅なりし
 悼むべき夜は乾鮭の鼻曲る
 湯気つつきては鱈の身のほろ崩れ
 玻璃の中より乾鮭を見てをりぬ
 ひそかにも息づいてゐる星月夜
 星月夜調和しづかに尽く大地
 初秋に適ふスープレの熱さかな
 一雨得て確かにしたる星月夜
 一つづつ片付けて債秋涼し
 たぐひなき日和を讃へ稲の花

龍野 浅井青陽子

同

神戸 山田弘子

同

東京 今井千鶴子

同

京都 安原 葉

同

福岡 松尾緑富

同

東京 坊城俊樹

同

樞原 稲岡 長

同

河内長野 吉年虹二

同

同

雑詠句評（二月号より）

（汀子）

霧流れ全てのものを遥かにす 榎原 稲岡 長

はてからはてへみつみつと霧がこめてくる。霧の海、茫茫。景遥か。時も遙か、とり返せない過去も、今につづく未来も。「霧流れ」には、万象「無常迅速」のひびきがある。一休禪師に、「いづれの時か夢のうちにあらざる」のことばもある。この句の「全てのものを遥かにす」は、大げさでない。「霧」の姿を、そのころを描き出している。（憲明）

今まで目の前に広がっていた情景が霧が流れはじめると、忽ちぐんぐん遠ざかって行ってしまった。今すぐそこにあつた景色が瞬く間に遠い景色になつてしまう霧の姿を作者は不思議な思いで見つめていたのであろう。消してしまうのではなく、遥かにするという表現が見事である。（汀子）（以下略）

物言はず春曙の訣れとは 福岡 松尾緑富

保佳・憲明・明倫
千鶴子・美奇・芳子
青虎・忠彦・葉
静龍・中正・汀子

物も言わずに春の曙のお訣れであつたとは。恐らくこれは悼句であろう。「願はくば花の下にて春死なん……」という西行法師の歌ではないが春の暁方の素晴らしい時に物を言わずに、そつと他界してしまつた或る人を悼む句である。「朝に生まれて夕べに死すとも可なり」という言葉もあるが、人生とは何かということを考えさせられる佳句である。（保佳）

永久の別れの悲しみを胸に秘めている作者は、その悲しみを言葉にしたくないという思いを抱いている。それも春という木々や草などが命の芽を吹く頃であり、その夜明けには一層自分の心の悲しみを口にはしたくないのであろう。胸の中で黙つて訣れを告

若水集

廣太郎選

秋晴・菌

茸山を足下に欧風レストラン
 料理長たけの素姓をひとしきり
 フランベに香のたつ菌取り分ける
 おおい雲おおい山々秋晴るる
 よきそらによきくもうかべ秋晴るる
 秋日和遙かを小さく彼の来る
 御僧を讃ふ平戸の秋晴れて
 峰寺の齋は菌も大切りに
 庭を出てつづく茸山へと案内
 組体操指の先まで秋日和
 玉入れや秋晴に触れ籠に入る
 秋晴を動かしてゐる棒倒し
 秋晴の風を正して万国旗
 ビデオズームリレーを捉へ秋晴るる
 靴脱ぎて昼餉の芝生秋日和
 大切なひと日秋晴賜りて
 秋晴の下に笑顔を交はしけり
 一筋の日ざしぐんぐん秋晴るる

西宮 本郷桂子

同

大阪 薦三郎

同

京都 安原葉

同

神戸 藤野佳津子

同

鹿児島 上迫岬夏

同

龍ヶ崎 今橋眞理子

同

同

秋晴の丘に聖鐘打ち交し
 東京 木下和代
 昼の部の跳ねて銀座の秋日和
 同
 秋晴の夜は水晶の星生れて
 同
 旋回も直線も驚秋晴るる
 野田 津々樂朋世
 菌また菌や踊り出しさうに
 同
 菌たち森の絵本の中にある
 同
 過去追うて佇む海辺秋日和
 東京 吉田小幸
 秋晴や思ひ出多き須磨明石
 同
 秋晴や淋しい時に来る浜辺
 同
 豊作の香と踏み入りぬ菌山
 香芝 橋本博
 菌生ふ山浅からず深からず
 同
 秋晴の水平線に地球の弧
 同
 秋晴に気力をもらひ出勤す
 石川 坂本玲子
 白衣とて脱ぎたき気分秋晴るる
 同
 秋晴のぬくみ背にあり診療す
 同
 落合ひしターミナル駅秋晴るゝ
 北九州 田上昭典
 ビーフストログノフ茸ふんだんに
 同
 てのひらに茸御飯の出来味見
 同
 叩かれて雨の菌のもろかりし
 金沢 小竹由岐子
 菌みなどこかが欠けて雨の園
 同
 秋晴が和服着る気にさせてをり
 同
 秋晴や洗ひ上がりし消防車
 苦小牧 杉山桂子
 秋晴や雲の行きたい所あり
 同
 秋晴や吾子はよく食べよくごろ寝
 同

若水集句評 廣太郎

てもこの「秋晴」のシーズンならではの事であろう。ぼつかり浮かんだ秋の雲、彩り豊かな秋の山々は、きっとこの呼びかけに添えてくれる事であろう。

庭を出てつづく茸山へと案内 京都 安原 葉

フランベに香のたつ菌取り分ける 西宮 本郷桂子

料理のレシピによく出てくる「フランベ」は、御存知の通り、フライパンで肉などを焼き、仕上げにブランドーなどアルコール度数の高い酒を焼いている上から注ぐと勢いよく燃え上がり、アルコール分をとばすと同時に料理が風味よく仕上がる、という調理法であるが、この句は「菌」の調理法として表現されている。最近では世界各地から美味しい菌が輸入されているが、西洋料理ならではの美味しそうな句に仕上がっている。

おおい雲おおい山々秋晴るる 大阪 蔦 三郎

何と素敵な句であろう。こんな日は実感として本当にこのように呼びかけたくなってしまうだろう。何の理屈もいらず、自身の気持ち素直に表現する事により、万民を納得させる力も見て取る事が出来る。しかもこのように呼びかけたくなるのは何といっ

庭続きの、ひよつとして「茸山」も所有されている人の案内なのだろうか。都会ではなかなかこんな情景にはめぐり会えないのではないかと思うが、案内する方、又案内される方の心の昂りが伝わってくる。さぞ茸の良い香りが漂ってきている事だろう。松茸なども想像出来、日本のこの時期の情景が拡がってくる。
(以下略)